資料展示図録

「満洲」の図書館

期　間：平成22年3月13日（土）～4月3日（土）

時　間：平日午前9時から午後5時まで

会　場：本学学術情報センター前渡り廊下

京都ノートルダム女子大学

人間文化研究科人間文化専攻主催

展示企画 岡村敬二

資料展示図録

「満洲」の図書館

京都ノートルダム女子大学

人間文化研究科人間文化専攻主催

展示企画 岡村敬二

はじめに－資料展示開催にあたって

一

この資料展示は、戦前期「満洲」地域に創設された図書館について、写真や資料をもとに構成したものである。

ここでいう「満洲」という地域は、日露戦争後のポーツマス条約により、ロシアから獲得した旅順－長春間の南満洲鉄道とその附属地、そして租借地としてロシアから譲渡された旅順・大連を含む関東州、ということになる。これが日露戦争後の日本の呼称する「満洲」である。

そして 1931（昭和 6）年の満洲事変、翌年 3 月の満洲国建国により、満鉄附属地以外の地域は満洲国領土とされ、さらに 1937（昭和 12）年 12 月には、満洲国治外法権撤廃により附属地行政権も満洲国へと移譲された。こうして現在の中国東北部（遼寧省・吉林省・黒龍江省）にほぼ近い地域が満洲と呼称されることになる。これら満洲と呼ばれる地域の、時代ごとの変化については展示のなかで説明していくが、とりあえずこうした歴史的経緯を持った「満洲の図書館」という展示を成立させていきたいと考えている。

二

このように歴史のなかに存在した「満洲の図書館」であるが、この「満洲の図書館」を問うてみることには何がしかの意義が在るのだろうか、次にこのことについて述べる。

まずは当然ながら図書館自体が持つ歴史的性格を検証することである。満鉄図書館の時代には、満鉄社業の図書館として会社経営に対し資料面で寄与し、同時に沿線住民に対しても開かれ、教養や娯楽面で公共図書館的な役割を果たした。満洲国へ移譲後の図書館にあっては、中国人（当時満人と呼ばれた）への識字教育などの任務までも負わされ大層苦慮した。このように外地にあって満鉄社業の図書館や、満洲国の図書館として果たしてきた社会的文化的な役割を明らかにすることである。

また満洲国建国時に創設された満洲国立奉天図書館は、事変後奉天宮殿の四庫全書を保全し、事変で散逸のおそれのあった档案などを整理保存するため関東軍の肝煎により成立した図書館である。同時に満洲国の文化事業振興のため日本の東洋学者らによる建議などに後押しされて文化研究院をこの図書館に附設するなど、満洲国草創期の文化政策策定にあたって政治的な役割を果たした。このように歴史の中でさまざまな任務を背負いこんで存在してきた満洲の図書館の、その政治的社会的な役割を問うてみることには意義があるであろう。

次に満洲の図書館員についてである。満鉄や満洲国の図書館に勤務するかれらは熱心に図書館活動を展開し、また盛んに文芸・学芸活動もおこなって、同人誌を刊行し作品を発表して出版した。学問・研究面でも活動は盛んで、その営為の成果は、同人誌や単行本として、また図書館館報や図書館刊行物としても結実した。この満洲時代の図書館員の活動や論述を明らかにすることは、図書館史の面からだけでなく、他の文化領域全般にも大きく資する結果になると考える。

三

こうした「満洲の図書館」を明らかにすることは、図書館を構成する諸要素を検証することにもつながる。具体的には、満洲の出版のこと、集積された蔵書のこと、満洲の図書館を成立させた都市のことである。

第一に図書館に集積される出版物についてである。当時満洲では、日本で刊行されて満洲に移入され民間に流布し図書館に集積されてきた出版物も存在したが、ここで問題にしたいのは満洲の地で刊行された出版物のことである。満洲の図書館や諸機関の活動などを明らかにするためにはそこで収集された出版物を確定し検証しなくてはならない。これら出版物は、現代にあっては収書や書誌作成に責任を持つ図書館が収集を担当する。ところが満洲においては、とりわけ初期にあってはそうした責任機関は存在せず満洲で刊行された出版物は、いわば放置されたままであった。満洲における出版事情については、法制や関連団体など少しずつ明らかになりつつあるが、当時に実際刊行された出版物の全容はまだまだ不明のままである。『満州国出版目録』によりその概要はうかがえるが、満洲で刊行された出版物の全貌は不明である。満洲国立中央図書館籌備処が設立されたのがようやく 1938（康徳 5）年で納本目録も掲載されたが、この図書館も敗戦まで籌備処つまり準備室に終わっている。このように満洲の図書館の存在を検討することは同時に満洲の出版事情を検証することにもつながるのである。

第二に蔵書のことである。満洲で刊行された出版物の幾分かが図書館に収蔵されたわけであるが、その図書館も終戦にともない瓦解して建物および蔵書は中国側に接収された。満洲の図書館を問うことはその蔵書についても当然研究対象となるのだが、それらの蔵書はいわば中国に「遺された」形になっている。中国にとって満洲国は「偽満」であり、それら「偽満」とされる諸機関の蔵書を現在に継承し保存しているということになる。「満洲の図書館」の存在は当然のことながら 1945 年 8 月に消滅しているのだが、その蔵書はこうした形で「遺されて」しまっているのである。それゆえ、満洲の図書館を取り上げるとき、その蔵書を問題にするとすれば必然的に現在所蔵している所蔵諸機関を調査しなければならない。この「満洲の図書館」の論述は「終戦」をもって終焉というわけにはいかないのである。今回の展示にあたって、戦後の中国側の接収から資料の再配置、現在の所蔵機関や所蔵目録・所在目録に言及しているのも、そうした理由からである。

第三は、「満洲の図書館」が活動した都市のことである。図書館はまず満鉄沿線の諸都市に建てられた。満鉄沿線の都市には満鉄の鉄道拠点があり本社や総局などが所在する。またそれぞれの地域には鉄鋼や石炭など鉱工業や産業が発達し、満洲の図書館は、それにふさわしい収集を資料し、目録作成や展示・広報の活動においてその存在を表明してきた。満洲の図書館は、もちろん全面的にではないが、そうした都市環境に包まれて運営がなされてきた。満鉄大連図書館は大連に所在する満鉄本社の向かいに設置され、満洲国立奉天図書館は奉天城内の、四庫全書の蔵される文溯閣近くの張学良邸を接収して創設された。哈爾浜図書館は 1935（昭和 10）年の北満鉄路譲渡により鉄道中央図書館とその蔵書を接収することで北満地域の中心地哈爾浜にふさわしいロシア語を中心とした一大参考図書館となった。このように都市の特質と歴史的経緯により満洲の図書館は創設され、その特色を生かしながら活動を展開してきたのである。この都市と図書館との関連はまだまだ充分に論じられないが、今後考えていかなければならない課題である。

図書館を問う、蔵書を問うという課題は、蔵書総体の来歴・由来を問うことでもあった。図書館や蔵書を媒介にして歴史の何者かを語ることが可能なのではないかと、若いころからの問題意識を堅持し持続して研究を進めてきたつもりではある。若かった図書館員時代の自身の問題意識を、こうして「展示」により表現できるということはまことに幸いなことであるといわねばならない。

四

この資料展示は、今年度より始まる筆者を研究代表とする科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）「戦前期「外地」で活動した図書館員に関する総合的研究」の成果の一部であり、今後この研究課題を展開していくための助走・試走でもある。ここでこの展示のテーマである「満洲の図書館」および科研課題である「外地で活動した図書館員」について、研究史およびその現在の到達点を簡単に述べておきたいと思う。

外地で活動した図書館員の論述集や回想は、はやくに柿沼介『剰語』（1972）、衛藤利夫『衛藤利夫』（1980）などが刊行された。図書館員を論じたものは、「図書館と戦争責任」（岡村 1983）と題し衛藤利夫を論じたものが早かったかと思う。稚拙なものだったが「外地」図書館研究に先鞭をつけたとの自負はある。

その後、『彷書月刊（特集満鉄図書館）』（1988）、『日本植民地文化運動資料』（1992 －）のシリーズ名で、満鉄大連図書館報『書香』など大きな図書館の館報復刻がなされた。そして衛藤利夫論（小黒浩司）、弥吉光長論（岡村）などが発表され、1990 年代後半の、柿沼介（岡村）・楠田五郎太（米井勝一郎）など人物論に続く。館界外でも、日本植民地教育史研究会運営委員会『植民地教育史研究年報』（1998 －）、東アジア近代史学会『東アジア近代史』（1998 －）などが刊行される。『旧植民地関係機関刊行物総合目録―満鉄編』（1979）で緒に就いた資料所在の研究も「「満洲国」関係資料解題」（1993 井村哲郎）をはじめとし、2000 年にはいると科研助成でも「外地」の日本語資料の所在調査を中心にいくつか見られるようになる。松原孝俊「台湾・朝鮮・満州に設立された日本植民地期各種図書館所蔵日本語古典籍の書誌的基礎研究」（2000-2001）などである。中国本国でも、この時期から日本語資料の所在調査が進められ 2007 年に『中國館藏滿鐵資料聯合目録』として結実する。また国際日本文化研究センターでは劉建輝代表「近代中国東北部（旧満州）文化に関する総合研究」など共同研究が展開され、さらに科研助成による満洲の出版の研究も進展してきている。

こうした「外地」の旧日本語資料の所在調査の現況や、「外地」出版事情、各分野の植民地文化研究の進展や、周辺領域の研究環境の整備といった現在の到達点を確認して、今回の展示を開催したいと考えている。

Ⅰ．満洲という地域と図書館

序の部分で述べたように「満洲」という地域は、日露戦争以降は旅順－長春間の南満洲鉄道とその附属地、そして旅順・大連を含む関東州の地域の呼称であった。これがすなわち日本ということになる。

1931（昭和 6）年の満洲事変に続く翌年 3 月の満洲国建国により、満鉄附属地以外の地域は満洲国領土とされた。満洲国は日本の傀儡国家ではあったが独立国とされていたため、この地域は日本ではなく満洲国であった。この満洲国建国直後に満洲国立奉天図書館が開館となり満洲国の図書館として運営されたが、満鉄附属地に所在した図書館は依然として日本の満鉄沿線の図書館であった。また関東州は日本の租借地であり旅順図書館などは満洲に所在する日本の図書館ということになる。

さらに 1937（昭和 12）年 12 月に満鉄附属地の行政権が満洲国へと移譲されることにより、この附属地は満洲国の領土となった。満鉄沿線に所在した図書館は、大連・奉天・哈爾浜など参考図書館が満鉄に残留となったが、大半の沿線図書館は満洲国に移管され公立図書館となって活動を継続させた。

1．満洲という地域のこと

すでに述べてきたように、戦前期に日本の支配下にあった「満洲」という地域は、日露戦争以降その支配の形態を変え、所管も変化した。それにともないその地域に設置された文化機関もその設置母体の変更を強いられる。図書館もその例外ではなかった。

たとえば長春市の図書館を例にとってみる。長春図書館は当初満鉄沿線の長春に設置された図書閲覧場であった。それが長春簡易図書館から長春図書館となるが、それは長春という地方の都市に所在する「満鉄図書館」にすぎなかった。1932 年 3 月には満洲国が建国となり長春は新京と改められて満洲国の首都に定められる。それにともない長春図書館は、満鉄所管のままで 11 月には新京図書館と改称する。この新京図書館は、満鉄図書館ではあったが首都新京特別市の図書館としてその任の遂行を期待される。1937 年 12 月、満鉄附属地の満洲国への移譲によりこの新京特別市図書館も満鉄から「満洲国」へと所管が変わることとなるが、この図書館は、のちに満洲国立中央図書館籌備処の設置により任務も籌備処に移していくことになる。満鉄図書館は、このように「満洲」という地域において、設立母体の変化に伴い図書館もその所管が変わりその任務や活動の内容も変化をしていくことになるのである。

『東亜大地図 満洲蒙古支那詳密』修文社 昭和 12 年

日本は赤色で明示されてある。日本本土と樺太南半分、台湾、朝鮮、それに関東庁が赤色で塗られている。これが当時の「日本」であった。中国東北部は満洲国とある。この地図が刊行された 1937 年 12 月に、満鉄附属地の諸施設は満洲国に移譲となり、満鉄沿線の図書館および蔵書の多くも満洲国に移譲され、満洲国の図書館として活動する。満洲で刊行された出版物奥付の出版年月は、全部がそうなっているわけではないが、満洲国のものは満洲国の元号である大同・康徳、日本とされる満鉄・関東庁の出版物は昭和と表記されることが多い。ちなみにこの地図の版元は東京である。

「満洲」の図書館、出版、文化運動関連略年表　展示に直接関連する事項については赤色表示した

年月	図書館、調査機関等の動き	満洲出版界、	文化運動および満日文化協会関係
1906（明治 39）	11 月 南満州鉄道株式会社設立	12 月 営業取締規則（関東都督府令 27 号）、新聞発行に関東都督の許可が必要	
1907（明治 40）	4 月 満鉄調査部図書室設置		
1910（明治 43）	9 月 図書閲覧場規定→ 17 年簡易図書館		
1918（大正 7）	1 月満鉄本社図書館設置（大連）		
1919（大正 8）	5 月 柿沼介、7 月衛藤利夫満鉄入社 10 月 会社図書館（後大連図）一般公開		
1920（大正 9）	5 月 第 15 回全国図書館大会開催（於満鮮）	3 月　満洲書籍商組合 組合員 50 名	
1922（大正 11）	6 月 奉天、大連図書館規則		
1923（大正 12）			3 月 対支文化事業特別会計法 . 制定
1925（大正 14）	4 月『書香』創刊	5 月「普通出版物取締規則」、普通出版物を届出制、新聞雑誌は営業取締規則に準拠、時事関係記事掲載は保証金千円。	10 月東方文化事業総委員会成立大会
1927（昭和 2）			12 月 北京人文科学研究所成立会
1928（昭和 3）			5 月 委員会中国側委員は済南事変に抗議し総辞職
1929（昭和 4）	1 月 大連図漢籍購入費特別予算 1 万円 4 月 満鉄図書館業務研究会発足		4 月 東方文化学院東京研究所・京都研究所事業開始
1931（昭和 6）	9 月満州事変で文溯閣四庫全書保全、12 月 前線の兵士に陣中慰安文庫を募集		
1932（大同元）	3 月 満洲国建国 4 月東北大学などの文献を接収整理、6 月に満洲国立奉天図書館開館 8 月（満鉄）『全満 24 図書館共通満洲関係和漢書件名目録』刊行 11 月（満鉄）長春図書館は新京図書館と改称	10 月「満洲国出版法」、新聞紙・雑誌発行に治安部大臣の許可、輸入の新聞紙雑誌取次は届け出（関東州と同調）	5 月 満洲国成立時関東軍に矢野仁一ら意見書提出。この時期、服部宇之吉ら「儒仏二教の研究機関及教育機関設置建議案」、内藤虎次郎ら「満蒙に於ける歴史言語人種地理宗教等に関する研究機関設置建議案」 11 月 対満文化事業日満当事者懇談会
1933（大同 2）	6 月（満鉄）伏見台図書館を伏見台児童図書館に改称		2 月 対満文化事業審査委員会内規決裁 3 月 水野梅暁渡満、羅振玉の清朝歴代史料の整理保存交渉 4 月 第一回対満文化事業審査委員会 7 月 水野梅暁渡満、羅振玉の古文書整理、実録・四庫全書の出版折衝 10 月 日満・満日文化協会第 1 回総会 11 月「対満文化事業ニ関スル意見交換会議」
1934（康徳元）	12 月 関東庁図書館、旅順図書館と改称		9 月 第 3 回日満文化協会評議員会、内藤の後任常任理事は池内宏
1935（康徳 2）	1 月（満鉄）各図書館増加図書目録を『書香』に掲載、「会社図書館図書相互貸借規約」「各図書館蔵書分野の協定」 3 月（満鉄）北満鉄路図書館を運営 12 月『満鉄公費図書館大連各館総合図書目録』刊行		4 月満洲国皇帝溥儀、第 1 回来日 5 月『纂組英華』刊行 5 月第 2 回日満・満日文化協会総会（於奉天博物館） 6 月 満州国立奉天博物館開館（旧湯玉麟私邸）
1936（康徳 3）	1 月 大連、奉天図書館増員 4 月 哈爾浜鉄路図書館、第三の参考図 4 月 大連図書館、中学生以下の入管禁止、社員無料	8 月「関東州および南満洲鉄道付属地不穏文書取締令」 9 月　株式会社満洲弘報協会創立、満洲国・満鉄・満洲電電の出資	12 月第 3 回日満文化協会総会（於東京） 12 月『大清歴朝実録』印刷完了
1937（康徳 4）	5 月「旧記ノ統一管理ニ関スル令」 6 月 第 31 回全国図書館大会（於満洲） 12 月 満洲国治外法権撤廃により満鉄図書館の多くが満洲国へ移譲	3 月「満洲図書株式会社法」、①満洲国教科用図書の印刷・出版・配給②国策優良図書の編輯・出版・頒布③社外出版優良図書の仕入れ卸売り配給など。出資は満洲国政府・東京書籍・日本書籍など	5 月 満日文化協会、訪日宣詔記念美術展覧会開催、満洲国内文化運動振興策 9 月 文芸親和会開催（美術・演劇・音楽・文学・民衆娯楽） 12 月 水野、東方出版事業のため追加予算申請し協会で『東方国民文庫』刊行
1938（康徳 5）	4 月（満鉄）満鉄図書館研究会設置のための会議召集（大連） 6月 民生部・満日文化協会・新京図書館主催「満洲国の図書館に関する座談会」 8 月国務院水曜会にて満洲国立中央図書館籌備処設置を決定（新京） 9 月 新制満鉄図書館研究会発足 9 月 満洲国図書館長懇談会	4 月　満洲弘報協会は満洲事情案内所を切り離し新聞通信事業に専念。 『現勢 康徳 6 年版』によれば、満洲国の出版物は、新聞をのぞいてほとんど官庁刊行物で、それに次いで特殊会社・会社発行のものが多い、もちろん点数からいえば民間のものが第 1 位。 12 月 官庁出版物編輯人倶楽部結成。	4 月 東方文化学院京都研究所は京大へ移管、東京研究所は外務省まま 10 月 対支文化事業の興亜院への移管
1939（康徳 6）	1 月（新京）新京資料室聯合会発足、満洲国立中央博物館 4 月 満洲国移譲後の図書館長、満鉄図書館研究会に参加し奉天省図書館聯合研究会設立宣言（奉天） 4 月 満鉄大調査部の成立 7 月 奉天省図書館聯合研究会結成式 11 月（協会）于長運（民生部）・栄厚（満日文化協会）・衛藤利夫・柿沼介らの発起で満洲図書館協会設立趣意書配布 12 月（新京）『新京資料室要覧』刊行 （協会）満洲図書館協会創立総会	8 月　識字読書週間実施要領（民生部訓令第 84 号） 12 月　満洲書籍配給株式会社設立。内地図書雑誌の円滑な輸入・配給を図る目的、「満洲図書会社」の姉妹会社。国務院弘報処・国通・満洲事情案内所・満日文化協会・満洲行政学会の代表者により予備会議。	日満・満日文化協会総会（於京都）

2．関東庁の博物館・図書館

日露戦争後に日本が租借した関東州について、その管轄官庁の変遷を述べておく。

1904（明治 37）年開戦の日露戦争の時期に、占領地行政を受け持ったのは瀋陽におかれた関東総督府であったが、それは 1906（明治 39）年 8 月に廃止となり、旅順に移されて関東都督府として設置された。この都督府は民政部と陸軍部からなり、関東州の管轄および南満洲鉄道株式会社の業務の監督を行った。

その後 1919（大正 8）年 4 月には官制が改正されてこの陸軍部が独立して関東軍司令部となり他方の民政部は関東庁となった。関東庁長官は文官で、関東州の管理および満鉄の監督・取り締まりを担当した。

ところが、満洲事変、満洲国建国という事態により、1932（昭和 7）年には対満政策の一元化をはかるために、関東軍司令官が関東庁長官・特命全権大使を兼任することとなる。そして 1934（昭和 9）年、在満機構改革により、関東州は関東軍司令官（駐満大使兼務）の指揮下にはいり、12 月には関東庁は関東局の設置により廃止となった。

このように関東州の統治機構は変遷しており、その時代ごとに、博物館、図書館などの設置母体の名称が異なることになる。そして先にも述べたことだが、この関東州は日本の租借地であり、関東都督府など満鉄を管理監督していた機関は、日本であった。さきに、この関東州や満鉄刊行物の出版年の多くが昭和と記されることを述べたが、このことは、これらの刊行物の現在日本での所蔵状況へも少なからず影を落としている。つまり関東州の機関や満鉄諸機関刊行物の、日本の大学図書館や公立図書館への資料寄贈という行為は、外地の日本から、内地日本への寄贈ということになるわけである。満洲国諸機関の刊行物は、それが日本の傀儡国家であったとはいえ、「外国」から日本への寄贈ということになる。通常図書館が資料を寄贈する場合、「配付先リスト」というものを持っているが、このリストに日本のどういった図書館が登載されて寄贈が為されたかということが意味を持ってくる。まだ充分にそうした配付先リストを見出していないので推測の域を出ないが、それが現在日本の図書館での満洲関係資料の所蔵実態に幾分かの影を落としているのであろうと思われるのである。

関東庁（旅順）（絵葉書）

関東軍司令部（旅順）（絵葉書）

『旅順図書館報』第 3 巻第 1 号（昭和 14 年 1 月）
（大阪府立中央図書館所蔵）

（1）旅順博物館

旅順図書館の母体は旅順博物館である。この博物館は、1917（大正 6）年 4 月に満蒙物産館として創設され、翌年に関東都督府博物館と改称、1919 年都督府が関東庁に改組となり関東庁博物館と改称、さらに 1934（昭和 9）年 12 月関東庁の機構改正により旅順博物館となった。所蔵品は満洲蒙古そして中国本土の考古美術や民族資料で、とりわけこの博物館創設の契機ともなった大谷光瑞の支那・西蔵・印度関係資料 7500 余点は、1917（大正 6）年 4 月満蒙物産館に寄託され 1929（昭和 4）年 9 月、光瑞の寄付申し出により博物館の所蔵となった。また記念館では旅順要塞戦に関する戦争記念品を蒐集していた。

旅順博物館（絵葉書）

旅順博物館記念館（絵葉書）

旅順博物館附属植物園 後楽園（絵葉書）

（2）旅順図書館

旅順図書館は、1918（大正 7）年 10 月、関東都督府博物館分館に図書閲覧所として創設された。旅順千歳町の旧露清銀行跡の関東都督府博物館分館に附設されたもので、それが図書館の出発である。1921（大正 10）年には博物館本館に移して図書部と称し、1925 年 11 月には松村町に移転して博物館図書部となった。1927（昭和 2）年 4 月関東庁博物館附属図書館と改称、翌年 7 月には閲覧規程を公布して図書の貸し出しを開始し、さらに 10 月には旧市街に帯出図書派出出納所を設置してその地方の利用に便宜をはかった。1929 年 4 月に庁令により博物館から独立して関東庁図書館となり、翌年 8 月には三階建ての書庫を増設、1934 年 12 月の機構改革で旅順図書館となった。この図書館は一般公開の図書館ではあったが、満蒙関係や日清日露戦役図書の蒐集、さらにロシア図書の収蔵などの特色をもち、とりわけ戦役当時の実写幻燈板は当時名高かった。さらに大谷光瑞寄贈（1930 年 3 月寄贈）の大谷文庫 3500 冊も所蔵し稀覯本も尠なくなかった。

1934 年に改正された旅順図書館図書閲覧規程によると、開館時間は午前 8 時から午後 9 時（11 月から 3 月までは 9 時開館）、館内閲覧は 3 冊まで、語学辞書は 1 冊限りで、館外貸し出しについては、関東省内の官公署長またその部局課長の保証ある者、また関東省内の学校長の保証ある学生生徒、旅順市民で市税を納める者の保証あるもの、館長が認めた者であった。貸し出し冊数は 3 冊 10 日である。

旅順図書館（『偽満洲国旧影』吉林美術出版社 2001 年より転載）

３．満鉄沿線附属地（1906 年－）の図書館

満鉄は鉄道経営を主要業務としたが、同時に広大な沿線附属地の行政権も与えられ、都市経営・農村経営にあたり、独立した地域の行政体としての役割を果たし各種施設を設立して運営した。満鉄図書館もそのひとつの施設であった。

満鉄図書館の始まりは、鉄道経営という社業に資するため 1907（明治 40）年に大連の調査部に置かれた図書室であると言える。それはのちに社業の参考図書館として大連図書館へと発展する。ほかに奉天図書館は 1920（大正 9）年には簡易図書館から参考図書館へと昇格するのだが、これら図書館は、会社の図書館とはいえ一般住民にも公開され、この公開性が満鉄図書館の大きな特色となり図書館の活動が活性化していく。

さらに沿線附属地外ではあるが 1923 年に哈爾浜図書館が設立され、1935（昭和 10）年には満洲国が北満鉄道を買収することで獲得した北満鉄路中央図書館を移管しそれを哈爾浜鉄路図書館と改称､1936 年に満鉄三番目の参考図書館となった。

一方沿線附属地在住の日本人のためには、1910（明治 43）年に公共図書館的な役割を持たせた図書閲覧場が設けられた。それはまず、瓦房店・大石橋・遼陽・奉天・鉄嶺・公主嶺・長春・安東の八箇所に設置され、以後本渓湖・撫順など他の地域にも広がる。それらは 1917 年に簡易図書館、のちには昇格して図書館と呼称され、沿線住民の読書活動のための役割を担った。

1919（大正 8）年にはのちに大連図書館、奉天図書館の館長として満鉄図書館を牽引していく柿沼介と衞藤利夫が満鉄に入社する。そして図書館は制度面でも整備が進められ、また特別予算もつけられて資料収集に励み、大連図書館では古刊漢籍や欧文の中国関係資料、またいわゆる大谷本やロス旧蔵資料など特色あるコレクションを形成していった。

満鉄図書館は 1931（昭和 6）年 9 月の満洲事変後にはすばやく時局の進展に資する活動を展開する。奉天図書館は時局文庫を開設し、哈爾浜図書館は露支満蒙資料室を、満鉄図書館員の研究団体であった満鉄図書館業務研究会でも出征した軍人のための「陣中文庫」を編成し、各館所蔵の時局関連図書の所在目録『全満二十四図書館共通満洲関係和漢書件名目録』の編纂をおこなうことで、満鉄図書館としての有機的な連携を誇示することとなった。

こうして時局に同伴しながら活動してきた満鉄図書館であるが、1937（昭和 12）年 12 月の満鉄附属地行政権の満洲国移譲に伴いそれぞれ分属先を異にし分解するにいたる。大連図書館は産業部（のち調査部)、奉天図書館と哈爾浜図書館は鉄道総局に属して社業のための資料収集や調査に務めた。沿線の満鉄各図書館は満洲国に移管されて満洲国の公立図書館としての活動を担った。

先の三館は満鉄に残ったが、大連図書館の柿沼館長は 1940 年 3 月に退職、奉天図書館の衞藤も 9 月には館長を辞任することとになる。1939（昭和 14）年にはいわゆる大調査部が成立したが、両館長の辞任に象徴されるように、それまで在満日本人に広く公開されてきた満鉄図書館は、調査研究に直接役立つ機関として再編されていく。1942（昭和 17）年には三館ともに調査部の管轄下に入り図書館の任務分担も定められた。それにあわせてこれまで社業と一般利用の二本立てのもとに収集されてきた蔵書についても大規模な移管が行なわれる。しかしながら満鉄調査部事件が起こり調査部は混乱、図書館再編の主導者であった石堂清倫も検挙され図書館も機能を低下させたまま終戦を迎えることになるのである。

「満鉄図書館｣の概略はおおよそこのようなものであるが、気になるのは 1937(昭和 12)年に満鉄を離れて満洲国に移譲となった旧満鉄図書館のその後である。当時奉天省では多くの旧満鉄系図書館が所在し、それらは 1939 年、寄って奉天省図書館聯合研究会を結成して「日系｣｢満系｣ごとに図書館活動を展開していくことになる。だがそれらの図書館は当時「満人」と呼称されていた主として中国人に対する識字活動など民衆教育の任も持たされて苦闘していくことになるのであった。

〈第 1 表〉治外法権撤廃にともなう満鉄図書館の行く先一覧

満鉄産業部	大連図書館、大連図書館沙河口分館（←沙河口図書館）、大連図書館埠頭分館（←埠頭図書館）
満鉄鉄道総局	奉天図書館、哈爾浜図書館
満鉄総裁室福祉課	近江町図書館（大連）、南沙河口図書館（大連）、埠頭図書館日出町分館（大連）、蘇家屯図書館（奉天）
満鉄地方部残務整理委員会	日本橋図書館（大連 3 年 8 月閉鎖）、伏見台児童図書館（大連 13 年 8 月小村侯記念図書館）
満洲国移譲	鞍山市立図書館、安東市立図書館、営口市立図書館、開原街立図書館、公立瓦房店図書館、公主嶺図書館、四平街市立図書館、新京特別市図書館、新京図書館茫家屯分館、新京図書館白菊町図書館、蘇家屯図書館（奉天）、大石橋街立図書館、海城街立図書館、奉天市公立八幡町図書館（←奉天八幡町図書館）、鉄嶺市公立図書館、撫順市立図書館、本渓湖街図書館、遼陽市公立図書館

「満洲国移譲」の図書館名は、「全国図書館統計表（康徳 6 年 2 月現在）」（『学叢』1 巻 2 号）に掲載の移譲後のものである。

〈第 2 表〉移譲直前満鉄各図書館統計（昭和 12 年 9 月末現在）

館名	職員数	蔵書冊数	毎月平均館内閲覧者数
大連図書館	46	216,462	1,728
日本橋図書館	5	10,632	2,392
伏見台図書館	4	6,951	2,431
近江町図書館	2	廃止（前月 4,949）	
埠頭図書館	5	8,157	1,573
日出町図書館	−	廃止（前月 5,162）	
沙河口図書館	5	14,768	937
南沙河口図書館	2	6,865	
瓦房店図書館	3	10,989	3,749
大石橋図書館	4	10,636	4,410
海城図書館	−	廃止（前月 2,045）	
営口図書館	3	7,825	1,581
鞍山図書館	5	18,799	5,277
遼陽図書館	4	13,086	2,210
蘇家屯図書館	−	廃止（前月 4,104）	
奉天図書館	35	87,226	5,293
八幡町図書館	7	15,277	2,230
高千穂図書館	−	（廃止）	
鉄嶺図書館	3	12,269	3,097
開原図書館	3	11,329	2,023
四平街図書館	3	10,702	3,506
公主嶺図書館	3	9,731	2,464
范家屯図書館	−	廃止（前月 1,766）	
新京図書館	3	42,832	7,470
白菊町図書館	−	（廃止）	
本渓湖図書館	3	8,442	2,911
安東図書館	5	17,793	1,449
鶏冠山図書館	−	廃止（前月 1,768）	
撫順図書館	9	30,382	5,193
計	162	562,688	61,924

職員数は村上美代治『歴史のなかの満鉄図書館』よりとった（1936 年度末、青年図書館員聯盟『図書館総覧』昭和 13 年度版）。蔵書冊数は『書香』101 号からで昭和 12 年 9 月末現在、毎月平均館内閲覧数は『書香』統計の社員・社外・児童あわせたもので新聞雑誌閲覧人数も含めてある。この時期の実勢をみるために掲出したが閲覧数は各館の統計のとり方など画一的ではない。

〈第 3 表〉移譲時満洲国の図書館事情

図書館	図書館数	所在地	蔵書冊数（冊）
国立図書館	1	奉天市	156,200
省立図書館	1	吉林市	50,200
	3	斉斉哈爾市、龍江省立図書館、第一民衆館・第二民衆館の 3 館	45,100
北満特区立	2		16,500
その他市県旗立図書館として			
吉林省	8	（蔵書合計）	約 18,200
龍江省	4		約 14,200
三江省	1		約 470
濱江省	11		約 6,000
安東省	7		約 38,200
奉天省	19		約 54,600
錦州省	7		約 24,700
その他	4		約 23,260
合計	68		約 457,420

「満洲国の図書館事業」（『新京図書館月報』16 号　1937 年 11 月 ）より作成。

（1）大連図書館

大連図書館は1918（大正7）年1月に創設、翌年10月1日から一般にも公開された南満洲鉄道株式会社設立の図書館である。その出発点は、日露戦争後の1907（明治40）年4月に創設された調査部の社業参考図書室であった。

大連図書館については、満鉄各図書館報『書香』第40号（昭和7年7月）に「満鉄図書館自己紹介その1 大連図書館施設概要」が載るので、それにより概要をみてみるとつぎのとおりである。

（イ）満鉄会社の参考図書館として内外の図書、新聞、雑誌を蒐集整理し、会社各般の業務に関する調査研究資料を会社各箇所に供給すると共に、これを公開し一般の閲覧に供すること。

（ロ）会社各箇所備附図書を管理し相互の連携利用を高める方策を図ること。

このように、大連図書館は、南満洲鉄道株式会社の社業に資する参考図書館であり、また社の資料管理の立場にありながら、兼ねて一般の閲覧にも供せられ、他の沿線図書館との連携を図ることが期待されていた。

社業の図書館でありかつ一般公開の図書館でもあるという二重の性格が、大連図書館と同様に参考図書館であった奉天図書館や、他の沿線各図書館の活動を一層活性化させていくことになる。図書館の活動として、時には時局に寄与するべく資料の組織化に励み、書誌作成や展示活動にも精力を注いだ。図書館員たちは、状況に強いられながら満身の力を込めてその任務を果たすべく活動を展開したのである。

この大連図書館は、大連市東公園町の満鉄本社に向かいあって建ち、建坪約3300坪、普通閲覧室100席、特別閲覧席10席を持って約20万冊の図書が収容できる書庫を備えていた。1932年3月末現在の蔵書冊数は、177,879冊（内洋書26,902冊）である。閲覧については、普通閲覧室は閲覧料1回2銭（30回券40銭）を払った人や図書帯出券（会社の業務の必要上所属長が要請した者および館長が必要と認めた者に発行）を持っている人に公開され、特別閲覧室は帯出券同様に発行される特別室閲覧券所持者に入室が認められ、書庫への出入りも許された。館外貸し出しはこれらの券を所持しているものに可能で期間は20日間であった（1932年現在）。

大連図書館の蔵書およびそのコレクションはたいしたものであった。大谷文庫や通志府県志、ロス旧蔵書、古今の漢籍類、欧文中国研究資料、オゾ文庫などである。これらの資料群は、大連図書館の各種目録に採録されて刊行された（これらの目録類は『満鉄大連図書館蔵書目録』全13巻 ゆまに書房1998年 として複製）。

そしてもうひとつ、満鉄図書館は、館報『書香』を刊行した。創刊は1925年4月で、まもなく休刊となったが、その後1929年4月復刊第一号を刊行した。大連図書館報とされた時期もあったこの『書香』は、満鉄図書館の活動の全容を知れるとともに、当時の満蒙や朝鮮・中国など東アジアの研究動向もうかがえる内容豊かで貴重な資料となっている。これも復刻版が刊行されている。

東公園の満鉄本社（絵葉書）

旧満鉄本社の現況（2001年12月）

大連図書館（絵葉書）

大連図書館のコレクションはさまざまにあったが、特別予算がつけられて収集された漢籍もたいしたものであった。この漢籍の蒐集には柔父松崎鶴雄の学識が大いに資することとなった。松崎は満洲国立奉天図書館の創設時には主事をつとめたが次男の政治運動の累により辞職した。図書館のコレクションは他に数奇な運命をたどったと言われる大谷光瑞の収蔵資料、ロシア革命時期に経済的に困窮したロシアの極東派遣軍から買収したオゾ文庫などがある。時代の荒波のなかで蔵書は移動し所蔵者を変えて残されていく。

現在の大連図書館魯迅路分館（2001 年 12 月）

満鉄時代の大連図書館の「威容」は現在の建物からはまったく感じられない。魯迅分館の背後に聳え立つ巨大なビル群がそうした「戦前の存在」を相対化しているかのようである。

満鉄線に架かる日本橋。左遠方にみえるのが日本橋図書館（絵葉書）

（2）日本橋図書館

『日本橋図書館沿革史』によれば、この図書館は、1915（大正 4）年 9 月北公園図書閲覧所として出発、翌年公園事務所跡に移転、のち簡易図書館、1922 年北公園図書館と改称。大連倶楽部の移転とともに当地に移動し 1926 年 4 月に日本橋図書館として開館した。つまり当館は、以前のロシア統治時代の倶楽部、憲兵隊・民政署を経て大連倶楽部となり、以後は図書館になったわけである。当時日本橋図書館は図書閲覧のほかに、大連医院内に病院文庫を、また浴場文庫を 2 ヶ所運営していた。現在、大連市が北九州市と姉妹都市提携を結んでいることもあり、門司図書館がこの日本橋図書館に似た建物により活動している。

満鉄日本橋図書館（絵葉書）

旧日本橋図書館の現況（2001 年 12 月）

訪問したときには大連芸術展覧館となっていた。『日本橋図書館沿革史』では、内部が細かく区分されていて使い勝手が悪かったと述べられている。以前とは内装は変わっているであろうと 10 元払って作品を鑑賞かたがた内部をうかがってみる。入口入ったところがホールでここは広いのだが 1 階部分に渡り廊下から奥へ続くようになっていて、もしこれが以前の造作にしたがったものであるとすれば図書館としてはずいぶんと不便ではあったろう。

（3）奉天図書館（満鉄）

満鉄奉天図書館は、奉天図書閲覧場（1910年11月）、奉天簡易図書館（1917年6月）を経て1920年4月に奉天図書館として満鉄本社地方支弁の参考図書館となった。同年には衞藤利夫が奉天図書館に転入し、爾来1941（康徳8）年に館長事務嘱託を辞するまでの20年あまりのあいだに資料の集積に励み満鉄第二位の図書館に成長させた。

衞藤は図書館の活動をもって時局に資することを念じ、1932年には満鉄図書館業務研究会のリーダーとして『全満二十四図書館共通満洲関係和漢書件名目録』を編纂し、件名を重視した目録を編纂して満鉄図書館所蔵資料の有機的な繋がりを強化しようとした。

また異郷満洲の地にあって使命感をもって活動する衞藤は、自らの存在を中国への宣教師や伝道者にかさね合わせてか、欧米人著作になる満洲・蒙古・中国関係の資料を収集し、ときにそれは満鉄社業の図書館にはふさわしくない資料群であると悪口もたたかれたりした。しかしながら満洲国建国直後に満洲国入りしたリットン調査団の来訪にあわせて、「遥々来られた西欧のお客様に、奉天図書館が長い間苦辛して蒐集した」乾隆帝御製『盛京賦』などが展示され、『乾隆御製盛京賦図版』が記念品として贈呈されたりもしている。

奉天図書館では、館報『収書月報』を発行し、また衞藤の著述になる奉天図書館名著解題を5冊、奉天図書館叢刊を25冊刊行してその資料の紹介にも努め満洲の学術界に大きく貢献した。

「(奉天)忠霊塔境内より満鉄奉天図書館書庫を望む」(絵葉書)

右遠方にスペイン風の書庫が見える。

満鉄奉天図書館（『満鉄附属地経営沿革全史』南満洲鉄道株式會社編 1939年より、大阪府立中央図書館所蔵 より）

1921年に竣工なったスペイン風のこの図書館は、奉天駅から千代田通りを一キロあまり下がって忠霊塔や千代田公園に面した通り沿いの便利な場所に位置していた。

旧満鉄奉天図書館（2001年10月）

中国鉄路工会 瀋陽鉄路局図書館とあった。自由市場でにぎわっている。以後瀋陽に調査に出かけるごとに撮影をしたりするが、大変繁華な一等地にあり、その変容は目まぐるしい。

旧満鉄奉天図書館（2002年10月）

自由市場は撤去となり図書館前の道は舗装されていた。この図書館建物の左翼部分は早くにとりのぞかれて、瀋陽鉄路の紹待所および羊のしゃぶしゃぶ料理店が隣接するに至っている。

旧満鉄奉天図書館（2006 年 10 月）

入口上の瀋鉄図書館の看板はとりはずされていた。ずいぶん荒れてきた様子だった。

旧満鉄奉天図書館（2007 年 8 月）

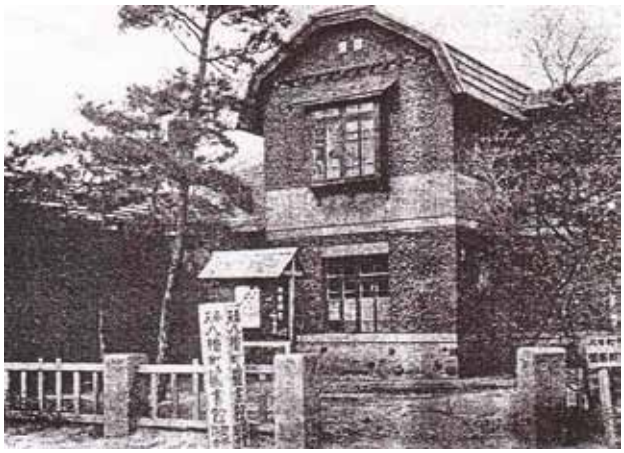
入り口の看板には大連理工大学など五大学の「遠程教育中心」と記されている。遠隔教育センターということであろう。学生や職員の出入りなどほとんど見られない。

旧満鉄奉天図書館（2007 年 8 月）

入り口の「遠程教育中心」表示の下のプレートには、このように奉天図書館旧址とあり、移動禁止建物の表示もある。

旧満鉄奉天図書館（2008 年 8 月）

この場所は、現在では駅から南東に大きく伸びる繁華な中華路と、それに交わる南京南街が交差する馬路湾といわれる付近にあり、今となってはこの小さな建物を保存するには非効率と考えられたのであろう、2009 年 1 月に取り壊されて移築となった。



八幡町図書館（前掲（『満鉄附属地経営沿革全史』より）

奉天図書館の分館であったが 1937 年 12 月には満洲国に移譲となり奉天市公立八幡町図書館となった。移譲後当時の館長は井上正義で、1939 年結成の奉天省図書館聯合研究会では指導的な役割をはたし日系図書館の副会長に就任した。奉天省図書館聯合研究会は満鉄図書館業務研究会（のち満鉄図書館研究会）を継承するかたちで結成されたものである。1939 年 4 月、満鉄奉天図書館を会場として、満鉄図書館研究会が開催され、席上で満洲国移譲組の八幡町図書館から、「奉天省図書館聯合研究会」設立に関する内規案が提出された。満洲国のいわゆる「満人」のための読書施設としての図書館・民衆教育館の「満系館員研究会」については、この内規案を中国語訳し瀋陽図書館を通じて各館に照会することも決定された。なおこの八幡町図書館の所在地はこの図録の表紙にも出した地図にも示されるが、中山広場近くの現瀋陽暇日酒店（ホーリディイン）あたりと思われる。建物のあとはない。

（4）哈爾浜図書館（満鉄）

1923（大正 12）年に、満鉄哈爾浜図書館は創設された。この地域は南満洲鉄道の沿線ではなく、したがって満鉄附属地外の満鉄図書館ということになる。

この図書館とは別に哈爾浜には東支鉄道の図書館が存在していた。その図書館の創設は 1902 年で、当初はロシアの東支鉄路倶楽部として設立、その名をスンガリー市図書館と称した。1925 年には東支鉄道管理局が中央図書館設置の必要性を痛感してこの倶楽部図書館を母体として北満鉄路中央図書館を創立、1930 年に南崗大直街鉄路局前に移転した。その後閉鎖などもあったのだが、1935（昭和 10）年 3 月の北満鉄路の接収にあたり、鉄路所属の図書も含めて移管継承されることになるのである。そして接収後名称をとりあえず哈爾濱鉄路中央図書館とし、のち哈爾濱鉄路図書館と改称、さらに 1936 年には、職制上この鉄路図書館をそれまでの満鉄哈爾濱図書館と合併させて、それぞれに哈爾濱鉄路局直属の参考図書館および埠頭区分館としたのであった。

この接収の作業にあたったのは、田口稔大連図書館員、山口吉康奉天図書館員、大橋国太郎奉天鉄路局員らで、田口はその一部始終を、感激に満ち興奮さめやらぬ筆調で『接収記念誌 第 1 冊 更正の哈爾濱鉄路図書館』『同第 4 冊 北満鉄路中央図書館の接収』などに記述し記録している。そこには何枚かの写真も掲載されており、掲出したのはその写真である。

『更正の哈爾浜鉄路図書館』（接収記念誌第一冊 康徳 2 年、滋賀大学経済経営研究所所蔵）、カットは山口吉康。

1935 年の北満鉄路中央図書館の接収時（『北満鉄路中央図書館の接収』接収記念誌第四冊 康徳 2 年、滋賀大学経済経営研究所所蔵）

第一列右から大橋国太郎、徳永弥武、ウストゥリャーロフ（館長）、山田實、許成琮（副館長）、山口吉康、狩野采女。施設の接収の後、ソ連・中国合成の旗を降ろし鉄路総局の旗を掲げた。

「新市街北満鉄道倶楽部」（絵葉書）

北満鉄道は中国側では東支鉄道と称した。この倶楽部内に北満鉄路中央図書館があったことになる。

旧北満鉄道倶楽部の現況（2001 年 10 月）

哈鉄図書館とあり中には哈爾浜市弘博日本語学校、鉄路余暇書店などが入っていた。建物の右翼半分は舞庁（ダンスホール）である。入口に哈鉄図書館の紹介文がありそれによると、1902 年東鉄路時期に建てられ、初めは松花江市閲覧館といったとある。現在では全国工会系統文明図書館としてその事業を展開、蔵書数 30 万、図書館は土曜日 4 時まで。鉄路用の図書館であり中には入れない。この建物は、昭和 12 年の第 31 回全国図書館大会の哈爾浜での会場にもなった。

「満洲」の図書館、出版、文化運動関連略年表　その 2

1940（康徳 7）	3 月 柿沼介大連図書館長退職 5 月 資料機関聯絡事務打合会議、満鉄諸機関再編案 9 月 衞藤利夫奉天図書館館長辞任（館長事務嘱託） 11 月（奉天）『奉天省図書館聯合研究会年報（第 1 輯）刊行	1 月　民生部に文化科、文化股・施設股・映画股・保存股。 2 月 満洲出版協会の結成協議、満洲弘報協会・満洲国通信社・満洲事情案内所・弘報処・協和会弘報科・満洲行政学会・満日文化協会・満洲新聞社・明文社・大阪屋號・満洲図書会社・大学書房・大同印書館・巌松堂・文話会の代表。 5 月 関東州出版協会設置 12 月 満洲弘報協会解散、国務院総務庁弘報処の組織と権限が拡大	5 月満洲国皇帝溥儀、第 2 回来日 6 月羅振玉死去
1941（康徳 8）	6 月（協会）満洲図書館協会第 1 回総会・大会	1 月「国務院総務庁分科規程」により国務院弘報処権限強化、図書館・博物館は民生部文化科が担当 1 月 満洲出版協会、総務庁弘報処の指定団体として設立	3 月 全満文化人大会にて政府成案を「芸文指導要綱」として発表
1942（康徳 9）	9 月 満鉄調査部事件、翌 7 月も 12 月 図書業務の統合調整案、参考三図書館調査部所属	1 月 新聞社法に基づく特殊法人満洲国通信社・満洲日日新聞・満洲新聞社・康徳新聞社の誕生 6 月 社団法人満洲新聞協会 10 月 満洲出版協会、物価統制法に基づく指定団体	9 月 満洲国国宝展覧会（於帝室博物館）文溯閣四庫全書・満洲文大蔵経・刻絲刺繍・陶瓷。 10 月 満洲国十周年慶祝献納画呈上式（新京）
1943（康徳 10）	6 月 満洲国図書館協会第 2 回総会大会 7 月 大同学院研究所設置につき調査資料収集で新京資料室聯合会に協力依頼 11 月南満地区図書館聯合協議会発会式	3 月 満配、新京資料室聯合会に参加し「図書特別配給要綱」を提示 6 月 満洲国文教部主催、全満図書館・民衆教育館長会議開催	
1944（康徳 11）	7 月 中央図書館籌備処の肝煎で満関資料連絡協議会開催 7 月 新京資料室聯合会を解散し満洲資料室聯合会を発足	11 月 社団法人関東州出版会、創立総会、出版企画審査委員会を設置	
1945（昭和 20）	1 月 関東州資料室聯合会設立準備会 8 月 日本敗戦、満洲国立奉天図書館長弥吉光長「文化の至宝」保存宣言 国民党長春に国民政府軍事委員会東北行営設置	1 月 満洲国弘報処、出版配給整備要綱を実施、出版文化研究所の開所。所長瀧川政次郎国立図書館籌備処長	10 月「日満文化協会経費補助申請ノ件」
1946（昭和 21）	3 月 民主政府が哈爾浜市接収、偽満哈爾浜市図書館（蔵書 28,500 余冊）をも接収。		夏 杉村ら文化財処理委員会を設置し在留日本人の絵画図書美術品を買い上げて中国側に寄付
1948（昭和 23）	2 月 東北図書館籌備処の成立（哈爾浜一曼街、哈爾浜市図書館東楼、元紅卍字会旧址）蔵書約 8 万冊 11 月 瀋陽解放。元国民党「国立瀋陽博物院籌備委員会図書館」（省館東院張学良旧宅）接収		
1949（昭和 24）	1 月 哈爾浜図書館所蔵の大部分の図書 11 万冊・備品を瀋陽に移動、残余 5 万余冊にて哈爾浜市図書館を成立。 2 月 東北図書館を瀋陽に開館		
1953（昭和 28）	東北図書館所蔵の影印本『大清歴朝実録』1220 冊をソ連レーニン図に寄贈		
1954（昭和 29）	2 月 朝鮮経済建設関連の日文資料 122 冊を朝鮮民主主義人民共和国に寄贈し館内で授与式		
1955（昭和 30）	6 月 東北図書館所蔵日文図書資料のうち社会科学・文学史学類の複本の一部を、北京図書館・中国科学院図書館・中国人民大学図書館・東北人民大学図書館・東北師範大学図書館・瀋陽師範学院図書館等に割当支給。以後吉林省図・黒龍江省図等に移管、前後あわせて十余万冊。 10 月 東北図書館、遼寧省図書館と改称		
1959（昭和 34）	9 月遼寧・吉林・黒龍江 3 省中心図書館委員会は『全国日文期刊聯合目録』編輯の事務局を遼寧省の。→ 1962 年 5 月、全国図書聯合目録編輯組で出版。		
1984（昭和 59）	『東北地方文献聯合目録』編纂		
2006（平成 18）	『中国館蔵満鉄資料聯合目録』（30 巻）		

戦後の図書館史については、遼寧省図書館「遼寧省図書館紀事」（『遼寧省図書館開館三十五周年紀念論文集』1983 年 7 月）、孟友群「哈爾浜市図書館三十五年」、劉慧荔「哈爾浜市図書館概況」、孫威「蔵書建設的回顧与展望」（『哈爾浜市図書館 建館三十五周年専集 1950-1985』1985 年）などを参照して作成した。

（5）新京図書館

新京という都市名は、満洲国建国後に名づけられた名称である。もとの都市名は長春であった。この長春に図書閲覧場が設けられたのは、他の沿線のそれと同様に 1910（明治 43）年のことで、その後移転をくり返し、1917（大正 6）年長春簡易図書館、1923（大正 12）年長春図書館となった。そしてその図書館が駅から南下する中央通り沿いに新築なったのは 1931（昭和 6）年のことである。満洲事変から満洲国建国へとつながり、長春が国都の新京と改名されるにともなって長春図書館は新京図書館と改称された。国都の図書館となり、政治・法制・産業・満蒙関係の資料要請もあり、幾年かは特別図書費が支給されて蔵書の充実がはかられた。しかしながら「新京図書館」と称してもそれは満鉄が設立母体の図書館であり、こうした矛盾をはらんだままの運営を余儀なくされる。

この図書館が満洲国の新京特別市図書館としてその役割を本格的に担うことになるのは、1937（昭和 12）年 9 月の新京特別市制（勅令第 279 号）とそれに続く同年 12 月の治外法権撤廃に伴う満鉄図書館の満洲国への移譲以降のことである。

満鉄図書館としての最終号となった 1937 年 11 月の『新京図書館月報 16 号』には、新京図書館の沿革が示され、満洲国への移管に際しての不安と責任の一端が披瀝される。満洲国の新京特別市立図書館となることで力量以上の責任を負わされることになるであろう不安の表明でもあった。そのひとつは、この号でも不安を漲らせて述べられている当時「満人」と呼ばれた中国人への活動である。これは奉天省にあっても同様で、その後の奉天省図書館聯合研究会の活動からも、満鉄から移管された図書館が、「満人」向けの識字運動や読書運動を担わされて苦慮したことが伺える。

この図書館が国都新京特別市にふさわしい活動を展開するために、満洲国建国以降満洲国の文化事業の振興を担ってきた満日文化協会は資金援助をおこない、漢籍を所蔵していた西三馬路図書館を満洲国に範たる満人教育機関として「西三馬路民衆模範図書館」と改称させた。後の法整備で 1941（康徳 8）年 5 月には、「公私立図書館規程」（民生部令 19 号）により「省長又は新京特別市長は省立又は新京特別市立図書館をして管内に於ける図書館の指導連絡に任せしむ」と法整備もなされる。

国都新京では、治外法権が撤廃される 1937 年前後から、満鉄本社のある大連や、鉄道総局の所在する古都奉天とならんで文化活動もようやく盛んになってくる。新京図書館にあっても、治外法権撤廃前から刊行されていた『新京図書館月報』には、図書館界の記事だけでなく学術界や出版界、さらには文化学術方面、とりわけ文学関連の記事が多く掲載された。館長山崎末治郎自らが「文芸出版界展望」を書き、山田清三郎・三宅豊子・大内隆雄・古丁・北村謙次郎も登場するが、これも『月報』を編集していた坂井艶司・松川幹生・津村雅雄ら館員の文学志向が大きく関わっていたのであろう。ほかに、山崎元幹・田口稔・佐藤大四郎・大野沢緑郎・大森志朗・香川鉄蔵・大谷健夫らの

新京図書館（『新京附属地写真帖』昭和 9 年 12 月南満洲鉄道株式会社地方部、本学蔵）

館員が玄関と階段下に写っているが、図書館の写真でこうした館員が写るのは珍しい。

旧新京図書館の現在の光景（2004 年 9 月）

新京時代には、警察署、郵便局と続く中央通り沿いに建っていた。通りの向かいには新京神社があり、少し南に行けば関東局や、満日文化協会の事務局のあった大興ビルもあった。

名前も散見され、新刊詩集の広告が載り、これら執筆者については簡単だが毎号ごと律儀に肩書きや、満洲浪曼同人・作文同人といった所属、そして著作などが掲載された。

この新京特別市図書館には地下室があり、その地下室で館員らが起居していた。図書館員川村耕三の回想記事「新京」によれば、この地下室は梁山泊さながらであったといい、そこには横田文子も出入りしまた木崎龍・松川幹男・平林英子・望月百合子・大野沢緑郎も常連として文学論を戦わせ、北村謙次郎もやって来て夜を徹して議論したという（『長春』第12号）。

当時の館員について『新京図書館月報』でこの時期を確かめてみると、大野沢緑郎は1938年9月同館退職（26号）、川村耕三同年11月退職（28号）、松川幹生翌年7月末退職（36号）とあり、それぞれに哈爾浜工業大学図書館・華北交通・哈爾浜市立図書館に転出した。また横田と結婚していた坂井艶司は1939年3月に大連図書館から転入してくる（31号）。その後坂井はすぐにこの『月報』の編集にあたり、33号から「あとがき」に名前が登場する。34号「あとがき」では、「例によって、望月百合子、吉野治夫、荒牧芳郎、万歳衛、緑川貢、阿南隆の諸氏に」執筆を依頼したと坂井が書いているように『月報』も一層文芸的な色合いを深めていくことになったのである。

川村の回想では館長山崎末治郎について「王道楽土を信じ優等生官僚」「階上の部屋には国策路線上の役人達が出入りし」と記しているのだが、山崎も文芸をよくし、必ずしもこうした二項対立の構図は当てはまらない。満洲国官僚や国策企業社員でありながら作家活動を続けた人たちも数多かった。そしてまた「満洲の図書館」にもこのように文芸活動を展開していた館員が数多く存在していたのであった。この『新京図書館月報』は2009年に金沢文圃閣から復刻され米井勝一郎が解題を書き、総目次も作成している。

また、これは国都ならではのことだが、新京では満洲国各部署の資料室が寄って新京資料室聯合会を結成し活発な活動を展開した。それは1939（康徳6）年1月に発足したが、この創設時に加わっていたのは、経済部・民生部・総務庁などの各部局と協和会・満鉄新京支社・満洲事情案内所・満洲中央銀行・満洲電信電話株式会社といった国策会社、それに建国大学、図書館としては新京特別市立図書館であった。そしてこの聯合会の事務局を新京特別市立図書館が受け持つことになり、『月報』にはその記事も掲載される。ただこの新京図書館に置かれた聯合会の事務局も、1939（康徳6）年6月の官制により成立した満洲国立中央図書館籌備処の存在が大きくなることで籌備処に移されることになる。この満洲国立中央図書館籌備処が成立するまでの間、この国都の図書館は、その責任をはたすべく活動を展開したわけであった。

『新京図書館月報』第16号（大阪府立中央図書館所蔵）

「満鉄図書館移管に際して」と題された満鉄図書館としての最終号になる。

左から新京図書館受入印、満鉄新京図書館蔵書之印、新京特別市立図書館受入印。左の印の上部には満鉄の社章もみえる

4. 満洲国立の図書館

（1）満洲国立奉天図書館

1931 年 9 月の満洲事変に続き、翌年 3 月には満洲国が成立した。この満洲国の建国にともない、時局に添うかたちで先行して成立したのは満洲国立奉天図書館であった。

この図書館は満洲事変により危機に瀕した奉天宮殿の四庫全書などの資料を保全するという名目で、1932（大同元）年 4 月、東北大学などに分散していた貴重資料を接収整理し、張学良邸をもって 6 月 18 日に開館したものである。満洲事変後この文溯閣四庫全書の保全を進言したのは満鉄奉天図書館の館長であった衛藤利夫であった。

かれの回想では、土肥原賢二特務機関長が文溯閣四庫全書保護の決裁をして関東軍佈告により保護を打ち出し、硝煙遠のいて戦乱が一段落したあと書簡で本庄繁司令官に念を押したという。後日森赳参謀が四庫全書を如何に保護すべきかと衛藤に相談し、できれば同じ構内に防火コンクリートの書庫を造るべきとの結論になった。衛藤の回想では、「森参謀は四庫全書ばかりでなく、その後の逆産の処理に大に力を入れて、今日の、四庫全書を含む国立図書館、それから国立奉天図書館の内容となった、奉天の宝物保存に非常な力を致された。森さんの尽力がなかったなら、あるいは四庫全書も、今日博物館に納められた夥だしい宝物も、あるいは戦乱のドサクサに散佚を免れなかったかも知れぬ」と述べる。森は当時関東軍第三課の課長であった。それにしても、戦争の中で文物を「保存する」という事態の、ある矛盾に満ちた出来事であったと言えようか。森は終戦の年の 1945 年に近衛第一師団長となり、8 月 15 日玉音放送阻止を迫った畑中少佐らに斬殺された。

満洲国立奉天図書館の開館にいたるまでを『国立奉天図書館季刊』所載の「館務要録」により示せば通りである。

1932 年 4 月 30 日　関東軍司令部、奉天城内の張学良邸宅をもって図書館設立を創議。

1932 年 5 月 1 日　臨時主事松崎鶴雄、嘱託秋貞實造、西田実着任。

15 日 京都帝国大学の羽田亨・小西重直・矢野仁一、軍の招聘に応じ来奉、図書館設立を協議。

6 月 10 日 袁金鎧参議館長に任ぜられる。

18 日 満洲国立奉天図書館との暫定名で開館。

6 月 18 日 馮庸大学蔵書を検収、以降遼寧東北大学・盛京故宮殿版など順次検収。

8 月 20 日 日本外務省文化事業部から第一次援助費

9 月 10 日 館内職務分担を、事務部西田實、司書部陳思（四庫全書考訂）・同秋貞實造（故宮老档調査）・金九経（図書整理兼副館長秘書）とする。

1933 年 4 月 1 日 本館職員を、館長袁金鎧（兼任）、副館長 金毓紱（兼任）、事務部西田實・西山為太郎、司書部金九経・安世琦、雇員 6 名と決定した。

5 月 26 日 湯玉麟公館の院内保存遼陵石刻拓片の拓本作業を開始

このようにして奉天図書館がまずもって満洲国の国立図書館として奉天に開館し、図書館として古典資料の収集整理をはじめ、拓本など博物館的な資料の整理保存作業をも開始した。だがこの図書館には、もうひとつ、日本の東洋学者たちによる満洲国での文化研究活動のための研究所が当初附置されていた。

それは文化研究院（当初の関東軍参謀案では文化院）と称されたもので、1932 年 5 月の京都帝大教授矢野仁一らの進言や、さらに服部宇之吉・狩野直喜・内藤虎次郎・濱田耕作ら国内の東洋学者らによる研究所設立の建議などを勘案して、当面それを、すでに成立していた奉天図書館におくこととしたものである。

研究所の経営、図書館の経営、博物館の経営、重要な未刊図書の複製刊行といった事業がその主要な任務で、当初はこの文化研究院が、満洲国立奉天図書館の経営もおこなうといった構想であったようだ。それが、日本の外務省や満洲国の官僚の思惑もあり、研究所は当分この旧張学良邸の図書館に置かれることとなった。これらのうち博物館は、これも接収された湯玉麟邸を充てることとなり満日文化協会の援助により 1935 年 5 月に開館する運びとなる。

満洲国立奉天図書館（絵葉書）

旧張学良邸を接収したものである。

旧満洲国立奉天図書館（2006 年 8 月）。

現在は張氏帥府博物館になっている。

張学良邸から私物を搬出（『満蒙事変写真帖』忠孝之日本社編輯部編　昭和 7 年　忠孝之日本社）

満洲事変のあと、張学良の居宅大帥府は日本軍に接収され国立奉天図書館が創設された。この写真は、満洲事変の後に、関東軍が張学良邸の大帥府から張学良の私物を運び出しているものである。この説明文には、張学良に私物を返還するための搬出であったとある。2001 年 10 月の博物館の展示キャプションでは、関東軍が張学良の私物を略奪しているとしていた。

（2）満洲国立中央図書館籌備処

満洲国の国立中央図書館創設は懸案であった。国立奉天図書館は、四庫全書や殿版、档案など特殊な資料が主力で、これとは別に国立の中央図書館の機能を持ち、研究的機能を兼備した国立図書館が各界から望まれていた。とりわけ国都新京では満鉄新京図書館があるのみで、国都の図書館としてはいささか規模が小さかったわけである。

このように創設が切望されていた国立中央図書館であるが、図書館創設をめぐっては、かねてより新京に一大国立図書館を創設するか（民政部案）、建国大学附設とするかの二案の対立があり両者とも自案を堅持し譲らなかった。それが 1938 年（康徳 5）年 8 月第 28 回国務院水曜会で、両案を総合して政府・協和会・建国大学研究院・大陸科学院など研究機関の利用および一般公衆の高度な研究調査も可能な妥協案として中央図書館設立のための籌備処がおかれることが決定された。10 月には勅令により職員・事務官を増員、12 月には奉天図書館および旧記整理処をその管轄下に置くこととなったのである。

この中央図書館は、それまで不十分ながら国都の図書館の任を負ってきた新京特別市立図書館に取って代わり、意識的に中央図書館としての責務を担い始める。新京の専門図書館連合体である新京資料室聯合会も、その事務局を中央図書館に移し、また「満洲国内普通出版納本月報」と銘打った納本目録を、1941 年 11 月から機関誌『資料公報』に掲載をし始めることになるのである。

『資料公報』（1941 年 11 月）（大阪府立中央図書館所蔵）

Ⅱ．敗戦による資料の接収と「遺された蔵書」の現在

1．終戦と資料の接収

集積された蔵書は、文化資源として、それぞれの図書館や資料館などに残される。それはそれぞれに歴史の重みを身にまといながら、それでも通常は穏やかに書庫に残されている。今回取り上げた、「満洲」という地域に集積された蔵書は、必ずしも穏やかに、というわけではない。それらは終戦時に中国側に接収され、また戦後の内戦を越えて、まさに「遺された」というべき蔵書である。それらは離合集散の果てに省立図書館や都市立の図書館、大学図書館に現在所蔵されている。

これら「満洲」の時代には、図書館に集積された蔵書のほかに、たとえば終戦直後に新京の地で、「文化財処理委員会」の名のもとに杉村勇造や江上波夫、瀧川政次郎、藤山一雄らが在満日本人の所持していた図書や絵画などを買い上げて中国側に引き渡した個人の資料も含まれ、それらも、当地に遺されたはずである。

ただこれらの資料はどのような経緯でどの図書館に保存されているかは明確化できない。旧蔵機関が図書館などであれば蔵書印で区分けできるが、新京での「文化財処理委員会」のような個人の蔵書の継承については、もう今となってはその来歴を知ることは不可能である。

ここで満洲つまり現在の中国東北地方において戦後に接収された資料およびその整理の経緯を略年表として示しておくと次のとおりである。

1945 年 8 月 18 日	ソ連軍哈爾浜占領、19 日長春・瀋陽、22 日旅順・大連占領。
1946 年 3 月 12 日	ソ連軍瀋陽撤退、4 月 14 日長春撤退。
3 月 27 日	「民主政府」は哈爾浜市を接収し偽満哈爾浜市図書館（蔵書 28,500 余冊）を接収、同年冬にそのうち価値のある蔵書部分を佳木斯に移転。
8 月	東北行政委員会および哈爾浜市人民政府は、日偽時期遺留の哈爾浜市図書館を東北行政委員会教育委員会の直接指導とした。
1948 年 2 月	東北図書館籌備処成立（哈爾浜一曼街。哈爾浜市図書館東楼、元紅卍字会旧址）、東北行政委員会教育委員会責成委員王修、蔵書約 8 万余冊、職員 7 名。
5 月	接収した資料の整理のため新分類法を作成、『東北図書館図書分類法』。
8 月 15 日	東北図書館正式開館 (東北文物保管委員会背金委員王修が主任)。蔵書 16 万冊。
11 月	瀋陽解放、東北国共内戦終結
12 月	長谷川潔・伊藤剛介ら、東北人民財政経済委員会（在旧北満ホテル）の徴用に応じ、旧時代の国策会社作成の経済調査資料や統計類を整理。新情勢に適応させるための編成作業および長春・吉林・哈爾浜その他の図書館から接収した資料の分類整理。
1949 年 1 月	哈爾浜所蔵の大部分の図書 11 万冊および備品を瀋陽に移動し、その残りの図書 5 万余冊および備品を哈爾浜に留める。のち哈爾浜市図書館を成立させた。
1 月ころ	東北財政経済委員会弁公室を旧満鉄奉天駅の鉄路総局 2 階に開設。
2 月 1 日	東北図書館を瀋陽に開館、館内閲覧のみで蔵書約 50 万冊。
10 月	東北財政経済委員会は東北人民経済計画委員会と改称。
	中華人民共和国成立

この年接収した、国民党各機関の図書や瀋陽鉄路図書館（元満鉄奉天図書館）の蔵書など市内各機関図書館の日本語図書資料を収集し 1951 年までに約 20 万冊を収集移管した。

1951年4月　東北図書館分館を本館附属児童図書館として開館。

1954年2月　中央の決裁で朝鮮経済建設に関連する日本語資料122冊を朝鮮民主主義人民共和国に寄贈し館内で授与式が持たれた。

1955年2月　遼寧日報社から日本語資料、商業局から新聞合本を収蔵した。

1955年6月　館所蔵日本語図書資料のうち社会科学・文学史学類は複本が多く、北京図書館・中国科学院図書館・中国人民大学図書館・東北人民大学図書館・東北師範大学図書館および瀋陽師範学院図書館などの機関に割り当て支給した。以後吉林省図書館や黒龍江省図書館にも寄贈移管し、前後あわせて十余万冊に達した。

10月　東北図書館を遼寧省図書館と改称。

1956年4月　遼寧省文化局に協力して蓋平・新金など8県の図書館設置に協力し各図書館に合計66,583冊を寄贈した。

同年　遼寧市図書館建設を支援し大量の資料を寄贈した。

1957年　営口図書館の建設を支援し一部分の図書を寄贈した。

1958年5月　遼寧地区中心図書館委員会で『遼寧地区外文期刊聯合目録』を編輯。事務局を遼寧省図書館におき館から9名が参加、露・西・日の3部分の主編。

1959年9月　遼寧・吉林・黒龍江三省地区中心図書館委員会は『全国日文期刊聯合目録』を編輯。編輯事務局を遼寧省図書館に置く。1962年5月出版。

1960年 秋　遼寧省図書館の新館建設準備。

ここにでているように、東北地方の図書館においては所在目録の編纂が幾度か試みられたが、1983年に刊行された、大連市図書館社会科学参考部・黒龍江省図書館採編部共編『東北地方文献聯合目録』がその集大成であった。「第1輯 報刊部分」「第2輯 外文図書部分」「第3輯 東北抗日聯軍及東北抗日武装闘争史料索引」の構成となっている（第2輯は、1990年に葦書房から『旧満洲東北地方文献聯合目録』として複製）。また各図書館においても、『東北地方文献索引 正・続』（1984·85 長春図書館）、『館蔵地方文献書目 1902-1990』（1992 哈爾浜市図書館）、『大連市図書館蔵古籍中日文東北地方文献資料分類目録』（6分冊）などが刊行されている。

さらに全国規模での目録『中國館藏滿鐵資料聯合目録』（滿鐵資料編輯出版委員會編 東方出版中心 2007.1）が2007年に刊行された。この目録は戦前期日本で刊行されて満洲に持ち込まれた資料も収載されていて、満洲時期に当地で刊行された資料を調べるにはいささか煩雑である。またさきの『東北地方文献聯合目録』との所蔵の異動もあるようで、両目録を併用して検索し、やはり現所蔵機関に照会し調査をする必要がある。

＊　＊

なお1983年の『東北地方文献聯合目録』に所載の旧日本語資料の所蔵機関は次のとおりである。『中國館藏滿鐵資料聯合目録』には55館載るが、当地で刊行された資料の所蔵目録という観点から1983年の目録における所蔵機関を採ったが、これ以降に図書館の新館などが建設されていて、現況はこの通りではない。

遼寧省図書館・瀋陽市図書館・大連市図書館・錦州市図書館・遼寧大学図書館・吉林省図書館・長春市図書館・吉林市図書館・吉林大学図書館・東北師範大学図書館・延辺大学図書館・吉林省社会科学院図書館・黒龍江省図書館・哈爾浜市図書館・斉斉哈爾市図書館・黒龍江大学図書館・斉斉哈爾師範大学図書館

これらのうち筆者がこれまで調査などで訪れたことのある図書館を以下に紹介していくこととしたい。

2. 大連

大連市図書館魯迅路分館

訪問したのは、2001 年および 2002 年であり、以下はその当時の実情報告である。

大連図書館の蔵書は、瀋陽（旧奉天）･長春（旧新京）・哈爾浜の図書館とちがって、他所に散ることなくおおむねそのまま継承されている。そして旧日本語資料の現在の所蔵機関としては、この大連図書館は、遼寧省図書館とならんで主力図書館である。なおこの図書館とは別に西崗区長白街に中央館が新館としてオープンしており、この訪問当時にあっても雑誌など多くの資料は新館に移されて保存されていた。

さてこの大連市図書館魯迅路分館は、中山広場（旧大広場）近く、旧満鉄本社の斜め前に位置している。路面電車の通りを隔てて近くには旧中日文化協会、通りの角に旧満洲日日新聞（現大連日報社）があった。満洲日日新聞は 1907（明治 40）年の創刊、当初は満鉄の機関紙といった様相で、その後合併などで紙名を変えたりしたが、1938（昭和 13）年に本社を奉天（現瀋陽）に移動し大連の版は大連日日新聞と称した。附近には満鉄本社、満鉄調査部や大連図書館、満鉄社員倶楽部や協和会館などが建ち並び、このあたりが満洲支配のある中枢地域を形成していたことになる。

旧満洲文化協会（2001 年 12 月）

満洲の政治的・文化的な宣伝工作をおこなうために関東庁・満鉄の肝煎で 1920（大正 9）年 7 月に満蒙文化協会として成立した。総裁は後藤新平、会長に中西清一、副会長相生由太郎・松本烝治らである。事業としては、満蒙を中心とした地方の文化的・経済的な調査・研究・報告・出版・紹介・宣伝に努めるというもので、機関誌として『満蒙之文化』を発行した（大正 12 年 4 月『満蒙』と改称）。協会は満洲国の成立とともに満洲文化協会と名を改め、満洲学会･全国経済調査機関連合会満洲支部･徳馨婦会などの経営にもあたった。なおこれは本文中の満日文化協会とはまったく別組織である。

満鉄本社、大連図書館附近の市街地図（『大連市案内図』昭和 10 年改訂 大連 大陸出版協会）。

地域ごとの地図を貼り合わせたので彩色が不ぞろいになっているが、大広場付近に満鉄関連の主要機関が集まっている様子がわかる。左端が大広場であるが、ここには大連市役所、民政署、地方法院、銀行、ヤマトホテルが建っていた。

2001年に訪問したときには、この大連市図書館魯迅路分館の2階右翼部分が日本文献閲覧室であった。他には、中央部が電子閲覧室、1階が報刊閲覧室、地階部分が自習室や音像教室などであった。旧満鉄大連図書館時代には門があり塀をめぐらして、その姿は勇壮であったが、今では門はなく通りに露出し、後方には巨大なビルが建ち並んでいて昔の面影はない。

日本文献資料館所蔵の旧日本語資料の検索ツールとしては、先の『東北地方文献聯合目録』に該館の請求記号が付記されたものが用意されていた。この魯迅路分館の旧日本語資料は、満鉄大連図書館の資料のうちM記号が付されたいわゆる満蒙資料の所蔵で、訪問した当時にあっては、このM記号以外の大連図書館所蔵資料および新聞雑誌は、西崗区長白街の中央館に移されていた。この魯迅路分館に収蔵されている資料の旧蔵機関は大半が満鉄大連図書館であるのだが、大連図書館のほかに小村侯記念図書館、沙河口図書館といった大連内の図書館の資料も散見できた。

なお、1945年以前の旧日本語資料の閲覧体制や、その閲覧・複写についての対応は図書館によりさまざまである。閲覧を許可しない図書館もあり、また電子複写を許さず写真撮影のみという図書館もある。閲覧にも費用がかかり、複写も、複写実費のほかに保護費とされる別の料金がかかるのが通常である。各館の実情については、筆者が訪問した折ごとに随時訪書記として報告してきた。参照していただけるとよいかと思う。

この魯迅分館には24時間開室の自習室が設けられていて、日曜日には多くの中高生がつめかける。指定の席がなくなった生徒が、この日本文献閲覧室にやってきて参考書を広げたりするが、そのつど係員が断っていた。

なお大連には、1937（昭和12）年の満鉄諸機関の移譲前には、この大連図書館のほかに、日本橋図書館・伏見台図書館・近江町図書館・埠頭図書館・沙河口図書館・南沙河口図書館などの図書館が存在していた。もちろんそれらは現在存在しないが、建物としては旧日本橋図書館が、今の勝利橋（旧日本橋）の近くに建っていることは述べた。また大連市西郊の沙河口地域には満鉄の工場や社宅があったのだが、ここに南沙河口図書館のあとではないかと思われる建物が残っていた。この南沙河口図書館は、1937年時点で約1万5千冊ほどの蔵書をもって活動していた。

旧南沙河口図書館の現状（2002年12月）。

現在は中国工商銀行などが入っている。

現在の魯迅路分館（2001年12月）

魯迅路分館日本文献資料館の通用入口（2001年12月）

３．瀋陽（旧奉天）

（１）遼寧省図書館

遼寧省図書館の前身は東北図書館であり、それは哈爾浜から移動してきたものである。大連以外の地域の資料はおおむねこの哈爾浜と瀋陽の東北図書館で接収されて整理された。それゆえこの遼寧省図書館の蔵書は、満洲時代の資料集積機関の資料が混在して保存されている。

現在の遼寧省図書館は、東陵区万柳塘路の文化路という大きな通りを突き当たった三叉路に聳え立っている。2001 年に書庫にいれていただいたがその 6 階の旧日本語図書は、書架の数で 35 列、それぞれが 10 連 7 段くらいであったろうか。資料は、東北図書館時代の分類法で配架されているようだった。旧所蔵機関の、たとえば満鉄図書館時代のラベルも貼付され、また蔵書印も満鉄奉天図書館、新京特別市図書館、満洲電業股份有限公司、南満州鉄道株式会社巡回書庫とさまざまな機関のものが見られた。

遼寧省図書館（2007 年 9 月）

現在の遼寧省図書館での閲覧事情は、2001 年の訪書のときと比べてずいぶん変わった。2006 年春に閲覧規則が改定されて所定の手続きが必要となった。図書館ホームページの「服務指南」の項目に「借閲須知」「関于接待外籍読者的具体執行意見」が掲出されている。それによると、外国人が来館して閲覧しようとするときには、あらかじめ所属機関または受け入れ単位経由で該館に連絡をとり、来館時には身分証明書を持参したうえで受け入れ単位の同伴により来館しなければならない、とされている。受け入れ単位のない場合については、瀋陽の総領事館経由で遼寧省外事庁の許可をとったうえで来館する、ということになっている。現在は資料の電子複写は許可せず、デジタルカメラなどの写真撮影は許される。ただその撮影費（複写費）はずいぶん高い。

筆者は、主として満洲時期に刊行された雑誌の閲覧に出かけたのだが、これら資料については、全文をスキャンしてデジタルライブラリー化する計画があるとの話であった。

（２）中国医科大学図書館

中国医科大学は、満鉄が 1911（明治 44）年に奉天附属地に創設したもと南満医学堂で、それを基礎とし 1922（大正 11）年の大学令をもって設置した満洲医科大学がその前身である。

1926（大正 15）年 5 月に京大から迎えられた黒田源次ら中国医学研究所（のち東亜医学研究所）のスタッフにより収集された中国医書・本草書が名高い。1929（昭和 4）年の購書の折に、満鉄大連図書館が購入した古書 3 万冊のうち満鉄図書館に必要でないとされた医書 6000 冊が寄託されそれが研究所の蔵儲の基礎となったという（岡西為人『中国医書本草考』など）。ちなみに黒田源次は第三代、岡西為人は第五代の附属図書館長であった。ただこの図書館も移転の由であった。

中国医科大学図書館（2001 年 10 月）

もとは南満医学堂で、それを基礎に満洲医科大学となった。図書館は現在建て替っている。

（3）瀋陽市図書館

瀋陽市図書館は北駅にほど近い市政府広場付近の北京街五号にあったが、2005年に五里河公園に大きな新館が建設されてそちらに移った。

瀋陽図書館の沿革は、1907（清光緒33）年、奉天提学使張鶴齢が東三省総督の認可を得て開設した奉天図書館にはじまる。満洲事変以降、地方維持会により市政公署の管轄となって奉天市立図書館と名乗ったりしたが、1932年3月の満洲国建国および1937年12月の満洲国治外法権撤廃により大広場付近の八幡町図書館が満洲国へ移管されて日本人向けの図書館となり、旧来の奉天省立図書館は奉天市公立瀋陽図書館と称して「満系」図書館となり二本立ての運営となった。この瀋陽図書館の館長は日本人で片岡憲三であった。

1945年8月、日本敗戦にともない奉天市公立瀋陽図書館は、国民党政府が接収し館名を瀋陽市立図書館と改め、八幡町図書館も国民党瀋陽市政府が接収して瀋陽市立図書館和平分館とした。翌年市政府は、大南門内の旧満鉄公所址へと図書館を移してこれを瀋陽市立図書館としている。これが旧瀋陽市立図書館で、現在の瀋陽市少年児童図書館である。その後瀋陽にも人民軍が進駐し、瀋陽市人民図書館として1949年3月あらためて開館することになる。そして1953年瀋陽市図書館と改称し、1991年には市政府広場の北京街五号に移り翌年5月に正式開館したのである。

2005年五里河に新設されたこの瀋陽市図書館に所蔵の旧日本語資料は、満洲国時代の奉天市公立八幡町図書館の蔵書をそのまま継承したわけではない。旧日本機関に所蔵されていた資料は、哈爾浜の東北図書館、そして瀋陽に移されて、その後に副本を中心として北京図書館や中国人民大学図書館など大学図書館や研究機関、吉林省図書館や黒龍江省図書館、そして瀋陽市図書館にも移されるという経緯を経ているのである。

また市内には遼寧大学図書館もあり、『東北地方文献聯合目録』にも旧日本語資料の所在箇所として収載されて資料も採録されているがあまり多くの資料は所蔵されていない。

「旧瀋陽市立図書館（1946年－）現瀋陽市少年児童図書館」（2002年10月）

市政府広場付近の前瀋陽市図書館（2001年10月）

現在の瀋陽市図書館（2006年9月）

現在の和平区図書館（2006年9月）

4. 長春（旧新京）

（1）吉林大学図書館

長春は満洲国の国都として 1932 年に新京と改称され、その国都建設のため計画的に都市作りがおこなわれた。道路は広くて整然としていて古都瀋陽とはずいぶん都市の雰囲気が異なる。

吉林大学および附属図書館は市内各所にあるが、旧日本語資料を所蔵しているのは前衛路 10 号の逸夫図書館である。2001 年 10 月に訪問したときには、「満鉄資料」と称された資料群約 6 列と、別書架に旧日本語資料が配架されてあった。後者は、戦後刊行の資料と混排で、なかには「満洲帝国外務局図書」「満洲電信電話株式会社之図書」「東北行営経済委員会」などの印記のあるものもあり、この「満鉄資料」と称している資料群がいまひとつ不分明であった。

吉林大学逸夫図書館（2001 年 10 月）

（2）長春市図書館

満洲時代の新京図書館は、駅から程近い旧中央通り沿いにあった。現在の長春市図書館は、人民広場（旧大同広場）の少し南の、一本西に入った通りの同志街 50 号にある。図書館には長春市図書館参考部編輯『東北地方文献索引（正）・続』（それぞれ 1984 年、1985 年）の編集を担当されたスタッフもおられ、資料の検索や保存の状態はとてもよい。『長春市図書館蔵東北資料目録（旧中日文）』（1958 年　223P　油印）の原本をコピーして事務用に使われているその目録を拝見したが、びっしりと書きこみがなされ訂正が施されていて、これまでの整理・目録化および蔵書の維持に非常な労力がかけられていることが感じられた。閲覧した資料には満鉄新京図書館のものもあったが、特段この図書館が新京図書館の資料を継承しているわけではない。

長春市図書館（2004 年 9 月）

『最新地番入新京市街地図』康徳 6（1939）年 4 月　三重洋行、本学蔵

上が新京駅、下が大同広場である。図書館は南北の中央通三分の一あたりの東側、新京神社の向かいで「図書館」と出ている。

（3）吉林省図書館

吉林省図書館は、新京時代の官庁街、現在の新民大街にある。3階中央に旧日本語資料のカードが設置され、日文図書目録（書名・建国前入蔵）20、同分類目録19、日文油印資料書名目録3、同分類目録3、旧日文期刊分類目録2が備え付けられている。また建国以前の新聞の所蔵もあり、盛京時報や泰東日報、大同報などの紙名もみうけられた。

保存文献閲覧室横の係員が書庫の出納をしてくれる。資料の中には、「朝鮮図書館備付龍山鉄道図書館」、その払出証明印、「朝鮮総督府鉄道局奉天出張員事務所備付用」「満洲中央銀行図書印」などがあり、開封鉄路局、太原鉄路局、張家口鉄路局など鉄路関係のものも目に付いた。

閲覧のため2008年に連絡をしたところ、新館建設のために旧日本語資料はダンボールに入れて利用が出来ないとの由であった。

吉林省図書館（2001年10月）

旧国務院（2004年9月）。

この別館に満洲国立中央図書館籌備処がおかれていたが、それはついに籌備処でおわった。

（4）東北師範大学図書館

2001年10月の訪書時には、東北師範大学（斯大林大街）は新館建設のために書庫の資料を移動する最中であった。建物1階の入ったところにカードケースが置いてあり、旧日本語資料のカードは書名・著者・分類の3種、分類カードだけで51箱ほどあった。旧日本語資料だけでなく戦後のものも混排で、カードは手書きしたものの複写、印字のものなどさまざまであった。

『黒龍江省立図書館図書分類目録』や『吉林省立図書館増加図書館要目』『建国大学研究員調査資料目録』などを見たが、資料のなかには、「満鉄奉天図書館」「師道大学図書館」、「哈爾濱商工公会庶務科文書受付」、「東北図書館蔵書印」などの蔵書印や受け入れ印の押されてある資料がみられた。この図書館も、瀋陽に移った東北図書館の蔵書のうち副本を中心にいくつかの重点大学に分配された、そんな大学のひとつであったわけで、旧蔵機関はさまざまである。

旧新京図書館前にある古書店（2004年9月）

中国東北部のいくつかの都市を歩いただけだが、露天で売っているものを別にすれば、店を構えて販売している古書店といったものあまり見かけなかった。長春のこの書店や瀋陽の故宮前、城内の市図書館少年宮前では少し古書資料を購入することができた。

5. 哈爾浜

（1）黒龍江省図書館

2002 年 9 月に黒龍江省図書館（南崗区文昌街）を訪れた折には、省図書館は長江路と華山路の交差点に新築移転の予定で、その準備中であった。ここに記すのは旧館の状況である。閲覧および出納は毛沢東筆の額が掛けられた参考閲覧室でおこなわれた。日文カード目録は、館蔵日文図書地方文献書名目録 3 箱、同分類目録 3、館蔵日文旧期刊分類刊名目録 2、ほかに館蔵旧日文書刊抗日文献分類編名索引であった。この参考室のカード以外にカード室には日文分類・書名目録がそれぞれ 25 箱あった。目録類を調査していて、『治安部情報課図書室資料目録 康徳 6 年 12 月』『（建国大学研究院資料室）資料速報 康徳 6 年 4 月』『（満洲中央銀行調査課）新着図書目録 康徳 7 年 5 月 1 日 -5 月 31 日』、『（新京資料室聯合会）康徳 6 年第 1 回資料取扱事務講習会 図書分類法参考資料』といった資料が目に付いた。

黒龍江省図書館（2002 年 9 月）

（2）哈爾浜市図書館

哈爾濱市図書館（哈爾濱市学府路）には旧日本語関係分類順カード、冊子体では『館蔵地方文献書目 1902-1990』がある。哈爾浜図書館の沿革についてはすでに述べたが、戦後では、1949 年 2 月、東北図書館（現遼寧省図書館）が哈爾濱から瀋陽に移って以降、一曼街の旧址に残された資料をもとに哈爾濱市図書館が 1950 年 10 月に正式開館している。そしてこの学府路新館の開館は 1991 年 1 月のことであった。

哈爾浜市図書館（2002 年 9 月）

旧哈爾浜市図書館（2002 年 9 月）。

戦後、満洲時期の偽哈爾浜市図書館を接収し哈爾浜市図書館とした。現在は児童少年図書館。

旧東北図書館（2002 年 9 月）。

哈爾浜市図書館の東隣にある建物。これが旧東北図書館ではないかと推測している。

（3）黒龍江大学図書館

黒龍江大学図書館は新しくてずいぶんきれいな図書館であった。旧日本語資料の蔵書の数はさほど多くなく3連ほどで実質14段くらいであった。聯合目録編纂作業のためか、哈爾浜市図書館に資料を移送しているとの由であった。

残された資料のうちでは、『北満経済月報』のラベルに興農部とあったり、満業保管図書・満州中央銀行調査課・SMR SHINKYO SMR (South Manchuria Railway) などの蔵書印が押されている資料も存在した。

黒龍江大学図書館（2002年9月）

（4）延辺大学図書館

延辺大学は1949年3月、つまり中華人民共和国の建国前に成立した大学で、朝鮮族の教育・研究面で大きな役割を果たしてきた大学である。1996年4月に延辺大学・延辺医学院・延辺農学院・延辺師範高等専科学校・吉林芸術学院延辺分院が合併して新生の延辺大学が再発足した。

旧日本語資料については、戦後の資料と混排で約19列ほどであった。戦前期旧日本語資料は中国人民大学図書分類法の旧分類で排架されていて、蔵書印では、延吉師道学校図書印・延辺高級師範学校・華北鋼鉄公司図書室・北支那開発株式会社・満洲電信電話株式会社調査科資料室などのものが目に付き、「昭和十六年三月合作社調査帰路於哈爾浜 東根武夫」といった個人の蔵書も散見できた。1945年以前の資料については大連や北京の支援を受けて購入した資料などもあるとのことであった。

延辺大学図書館（2002年9月）

（5）延辺朝鮮自治州図書館

この図書館は、満洲時期の旧日本語資料の所在目録である『東北地方文献聯合目録』にも出ない図書館であり、満洲時期の日本語資料はほとんど所蔵をしていない。2階の参考諮詢室で『朝鮮総督府』『満洲旧慣調査報告 租権』『満洲館ノ思ヒ出ヲ語ル』など出納してもらったが、延吉市図書館・延辺州図書館・延辺図書館といった該館の館名の履歴を示すものや、戦後の延辺医学院・国立長春大学図書館、また戦前の東亜同文書院研究部蔵書印や佐藤潤之蔵書といったものが散見できるだけだった。この州都延吉には満洲国時代に延吉街立厚生館図書部があった。皇紀二千六百年慶祝記念事業で開設した民衆教育館で、日本語資料3,800冊あまりを所蔵していた。

露天の古書店（2002年9月）

延辺朝鮮族自治州政府前、通りを隔てた路上で古書を売っていた。

編集後記と文献一覧

今回開催した資料展示会およびこの展示図録の作成は、筆者を研究代表者とする科学研究費助成の基盤研究(C)「戦前期「外地」で活動した図書館員に関する総合的研究」(平成 21 年から 3 年間)のための「助走」であり「試走」でもある。これまで 30 年ばかり、満洲の図書館のこと、図書館員のことを調べてきたが、いまようやく満洲をふくめた外地図書館員の総体的な研究に取り掛かれる環境が内外に整ってきたと、そんな気がしている。

今回の展示は、その内容的な性格から、写真を中心とする展示にならざるを得なかった。折にふれて、古書店や骨董市で入手した戦前期満洲時代の絵葉書や、さらには戦前期に刊行された館報・報告書などに掲載の写真や挿絵などを集めて構成をした。出版物そのものも、もう少し展示をしたかったが、残念ながら本学図書館に備え付けの展示ケースが充分でなく、出品が充分にできなかった。また年度末の忙しい時期に加えて、所属学科の刊行物の編集と執筆もあり、この展示と図録の準備に充分な時間が割けなかったが、構想だけは早くから持っていて、現時点では精一杯の展示となったと思う。この「助走」を経て、現在進行中の「外地で活動した図書館員」の営為について、個々の人物を取り上げながらあらためて展示や展示図録が作成できればと考えている。

外地の図書館や図書館員の活動についても、まだまだ不分明なことが多いが、知見を得たことがらから順に積み上げていくことができればよいと考えている。ご批評をお願いしたいと思う。

なおこの図録の本文および展示キャプションのいくつかは、これまで筆者が論述してきたものをもとに作成した。それらを以下に示しておく。

・『遺された蔵書－満鉄図書館・海外日本図書館の歴史』(平成 6 年 12 月 阿吽社)
「満鉄図書館蔵書集積の歴史」「残すこと遺されること―満鉄図書館員たちの資料整理」「満州国立奉天図書館の歴史」「附録 満鉄図書館刊行物一覧／索引」
・「書誌書目シリーズ 47『満鉄大連図書館蔵書目録』解題」(平成 10 年 10 月 ゆまに書房)
・「大連図書館長柿沼介の事蹟」(『朱夏』第 12 号 平成 11 年 4 月 せらび書房)
・「『旅順図書館報』からみた旅順図書館」(『朱夏』第 12 号 平成 11 年 4 月 せらび書房)
・『満洲国資料集積機関概観』(平成 16 年 6 月 不二出版)
「蔵書印から外地での書物の集積とその遺蔵に想いをはせる」「奉天省図書館聯合研究会の創設と活動」「新京資料室聯合会の創設と活動」「満洲図書館協会の創設とその後」「満洲における資料集積機関・蔵書目録一覧」「戦後東北三省における旧日文資料関連略年表」「東北三省訪書の旅－瀋陽・哈爾浜・長春」「大連市図書館訪問記 2001 年 12 月」「延吉・哈爾浜訪書記 2002 年 9 月」「瀋陽訪書記 2002 年 10 月」
・『日満文化協会の歴史―草創期を中心に』(平成 18 年 6 月 私家版)
・研究成果報告書『戦前期中国東北部刊行日本語資料の書誌的研究』(科学研究費補助金 基盤研究 (C) 平成 21 年 3 月)
「満洲国の出版法制と出版目録」「瀋陽市図書館訪問記 (2006 年 8 月)」「遼寧省図書館訪書記 (2007 年 8 月)」「遼寧省図書館訪書記 (2008 年 8 月)」
・「「満洲」「満洲国」出版法令および主要出版団体 (増補版)」(『(文部科学省科学研究費補助金特定領域研究成果報告書) 東アジア出版文化の研究調整班 (E)「出版政策研究」班研究報告集』平成 17 年 3 月)
・「満鉄図書館」(『別冊 環 12 満鉄とは何だったのか』藤原書店 平成 18 年 11 月)
・「『新京図書館月報』復刻の意義」(『新京図書館月報』復刻版内容見本 金沢文圃閣 平成 21 年 4 月)
・「「満洲国」期の〈大連・奉天・新京〉三都比較論 ―創出された文化資源の諸相」(本学人間文化専攻第 1 回「文化の航跡」研究会発表レジュメ 平成 20 年 1 月 31 日)
http://www.notredame.ac.jp/ningen/graduate/study5.htm (人間文化専攻「文化の航跡」研究会)

(表紙地図:『大奉天新区画明細地図』康徳 6 年 2 月満洲日日新聞社、本学蔵)

最後に所蔵図書館の変遷を示す蔵書印を掲げておく。右の印は拙著にも掲出したが、「長春図書館」の受入印(7. 9. 10)、「南満洲鉄道株式会社図書印」「東北財政経済委員会調査統計處図書之印」「吉林省立長春図書館」(民国 36. 8. 25)、中国人民大学図書館蔵書、そして新京のマーク付きの三段赤ラベルである。真ん中のものは、長春図書館 (14.9.21)、「南満洲鉄道株式会社図書印」「満鉄長春図書館蔵書之印」および満鉄の社章が入ったラベルである。左の印は、「東北行營経済委員会資料室」、「東北財政経済委員会調査統計處図書之印」とある。前者は国民党の委員会で後者は解放軍の統計処である。奇しくも両者が同じ目次ページに押印されたことになる。

今回の展示構成

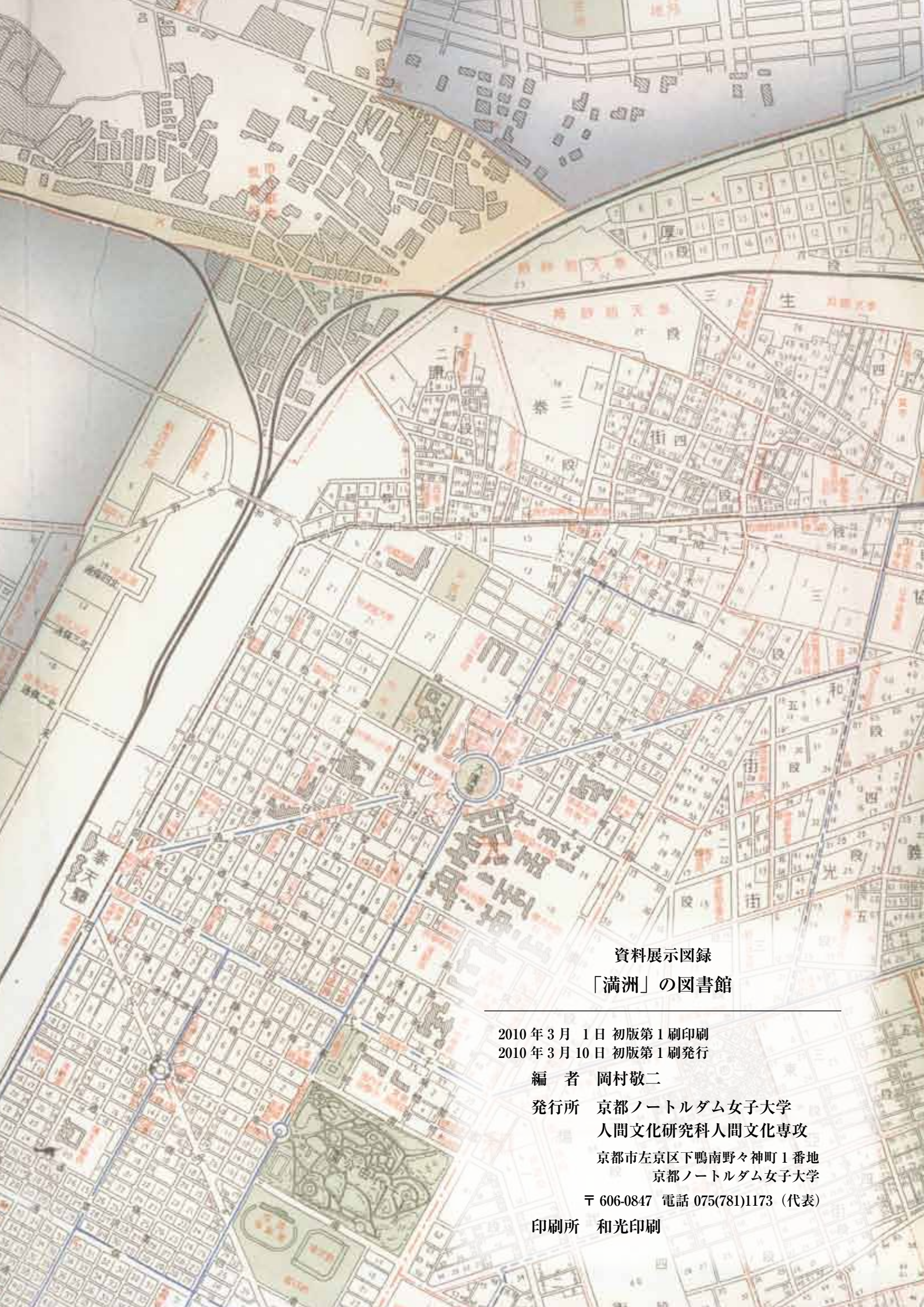
はじめに－資料展示開催にあたって

Ⅰ．満洲という地域と図書館

1. 満洲という地域のこと
2. 関東庁の博物館・図書館
   （1）旅順博物館　（2）旅順図書館
3. 満鉄沿線附属地の図書館
   （1）大連図書館　（2）日本橋図書館　（3）奉天図書館　（4）哈爾浜図書館　（5）新京図書館
4. 満洲国立の図書館
   （1）満洲国立奉天図書館　（2）満洲国立中央図書館籌備処

Ⅱ．敗戦による資料の接収と「遺された蔵書」の現在

1. 終戦と資料の接収
2. 大連
   大連市図書館魯迅路分館
3. 瀋陽（旧奉天）
   （1）遼寧省図書館　（2）中国医科大学図書館　（3）瀋陽市図書館
4. 長春（旧新京）
   （1）吉林大学図書館　（2）長春市図書館　（3）吉林省図書館　（4）東北師範大学図書館
5. 哈爾浜
   （1）黒龍江省図書館　（2）哈爾浜市図書館　（3）黒龍江大学図書館
   （4）延辺大学図書館　（5）延辺朝鮮自治州図書館



資料展示図録

「満洲」の図書館

2010 年 3 月　1 日 初版第 1 刷印刷
2010 年 3 月 10 日 初版第 1 刷発行

編　者　岡村敬二

発行所　京都ノートルダム女子大学
人間文化研究科人間文化専攻

京都市左京区下鴨南野々神町 1 番地
京都ノートルダム女子大学

〒 606-0847　電話 075(781)1173（代表）

印刷所　和光印刷